



TITLE:

<書評>中野亜里;遠藤聡;小高泰;玉置充子;増原綾子.『入門東南アジア現代政治史』東京：福村出版, 2010, 263p./清水一史;田村慶子;横山豪志(編著).『東南アジア現代政治入門』京都:ミネルヴァ書房,2011, 269p.

AUTHOR(S):

佐々木, 拓雄

---

CITATION:

佐々木, 拓雄.<書評>中野亜里;遠藤聡;小高泰;玉置充子;増原綾子.『入門東南アジア現代政治史』東京：福村出版, 2010, 263p./清水一史;田村慶子;横山豪志(編著).『東南アジア現代政治入門』京都:ミネルヴァ書房,2011, 269p.. 東南アジア研究 2012, 50(1): 140-143

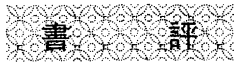
ISSUE DATE:

2012-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160938>

RIGHT:



中野 亜里；遠藤 聡；小高 泰；玉置 充子；増原 綾子、『入門 東南アジア現代政治史』東京：福村出版，2010，263p.

清水 一史；田村 慶子；横山 豪志（編著）。『東南アジア現代政治入門』京都：ミネルヴァ書房，2011，269p.

「東南アジア政治」を教えるというのは容易なことではない。第 1 に，東南アジアはきわめて多様な言語や宗教，人間集団を内包する地域であり，西欧や中東に見られるような共通の文化的土壌をもたない。西欧列強と日本の支配を受けたことはこの地域の（タイ以外の）国々にとって大きな共通点であるが，冷戦期のイデオロギー分断に示されるように，現代におけるその政治発展のありかたも多様である。これを概括して論じるには，相当な知識と体系立ての能力が必要となる。

第 2 に，日本の研究者（教育者）養成機関は，その知識や能力を身につけるためのシステムをもたない。東南アジア全体について学んだ後に研究対象国を選ぶコーネル大学などのシステムとは異なっており，日本では大学院入学後まもなく対象国選択をする。その後は業績づくりと職さがしで懸命の日々となり，東南アジア地域の他国について知識を深めるゆとりをなかなかもてない。「東南アジア研究者」が集う学会では，自然と国ごとの仕切りができていくかのようで，他国関連の発表への質問や意見には，「専門外で恐縮ですが」という枕詞がつきものとなる。

このような事情を背負った「東南アジア研究者」たちは，大学で職を得るとすぐに，ある種の試練に立たされる。特別な場合を除いて，現在，大学の講義という場で求められているのは，インドネシアやタイ，ベトナムなど個別の国について延々と語るのではなく，東南アジアやアジアといった，より広くて「役に立ちそうな」対象についての知識を提供することである。この要請に応えるということは，「専門外」であった事柄を専門家として語るということにはかならない。そこで，そ

の容易ではない仕事の実現のために，講義の進行と準備をサポートしてくれる教科書が探し求められることになる。

ありがたいことに，この 2 年ほどの間に相次いで 2 冊の東南アジア政治関連の教科書が出版された。ひとつは福村出版刊『入門 東南アジア現代政治史』，もうひとつはミネルヴァ書房刊『東南アジア現代政治入門』である。いずれも「入門」というように，初学者を読者として想定した本である。そして両者ともに，歴史的経緯をたどりながら東南アジア地域の政治を理解することを旨としている。サイズはいずれも A5 判，前者はソフトカバー，後者はハードカバーの装丁で，価格はそれぞれ 2,400 円（＋税）と 3,000 円（＋税）である。

『入門 東南アジア現代政治史』は，3 人のベトナム研究者を含む 5 人の共同執筆による。執筆分担が巻末に示されているが，分担執筆を感じさせないほどに全体の文章は簡素に均され，執筆者のクセや個性は排されている。いわゆる客観的事実のみをとりあげた概説といえる内容で，重要な人名や語句はゴシック体表記となっている。意図的であろうが，高校の歴史教科書と似た作りであり，内容的にもほとんど高校世界史の続編（東南アジア編）という位置づけで書かれたものであるようにみえる。

「はじめに」は，全体の構成と趣旨の説明である。前近代から東南アジア諸国独立まで（第 I 部），冷戦下での建国の過程（第 II 部），冷戦後の民主化と地域統合の状況（第 III 部）という時期区分と構成が示されるとともに，本書のねらいが次のように述べられている。「本書を通して東南アジアの政治を学ぶ人々には，この地域の事象を……歴史的背景から理解し，なぜ現状のようになったかを考えるセンスを養っていただきたい。また，東南アジアという地域レベルから世界全体を見つめ直す視角をもつようになっていただきたい。さらには，本書をきっかけに東南アジアと日本の関係に関心をもち，自分たちの生活とこの地域のつながりを考えるようになっていただければ幸いである」。

「はじめに」に続く序章は，政治以外の事柄を扱っている。「東南アジア」が 20 世紀半ばに成立

した新しい概念であることを説明した後に、東南アジアの地形や気候、植生について案内を行っている。また、この地域の特徴ともいわれてきた文化の重層性（第1章で関連事項が詳述される）について導入的に触れている。政治史を知ろうとする前に、東南アジアの人々がどのような場所で、どのような価値観を抱いて暮らしているのかを知ることとはとても重要である。講義者は、本章とともに、人々の暮らしの様子がわかる自前のスライドを見せながら話を進めると十分な「つかみ」が得られそうだ。

本論部分の内容は、大まかな流れを追うにとどめたい。第I部（1～4章）「東南アジアの近代——植民地化」は、中国や西欧の商船が行き交う前近代から話が始まる。伝統王朝による外来文化の受容が進む一方で、各地で独自の文化が育まれる過程が描かれる。そして話は、欧米列強による分割と植民地統治、植民地体制下におけるナショナリズムの展開へと進む。日本の東南アジア侵略とそれへの抵抗運動についても、現地の視点を重視しつつ要所がまとめられている。本パートのみならず本書全体を貫くスタイルとして、各トピックはその都度、国別のかたちで論じられている。偏りを避ける意味でこれは有効である。

第II部（5～9章）「独立と国家建設——冷戦の影響下で」は、独立とその後の国民国家建設について外的要因を重視するかたちでまとめられている。最初に、インドシナにおける冷戦構造の波及とベトナムの南北分断について記述がある。次に、インドシナ以外の諸国についても、それぞれどのようなかたちで独立が達成されたかが説明される。さらにインドシナ情勢の悪化とベトナム戦争に話題が進み、その一方で、インドシナ以外の諸国における国民国家建設の苦悩や、「開発独裁」とその成果がとりあげられる。最後に再びインドシナに戻り、中ソ対立を背景としたベトナム・カンボジア紛争の経緯をふり返る。東南アジア諸国の政治発展の多様性と、そのなかでの国民国家建設の苦悩という共通性が、さまざまな出来事の記述とともに示された内容である。

第III部（10～13章）「地域統合と民主化——新世紀の課題」は、ASEAN（東南アジア諸国連

合）の設立過程をまとめるとともに、この地域機構にインドシナ3国が加わるまでの過程を描いている。地域内の連帯の深まりを示す一方で、もうひとつの主題として民主化の波が各国を覆ってきた事実をとりあげている。この民主化の問題にどう取り組むかが、各国のみならず地域共同体としてのASEANの課題でもあるが、本書は最後に、そのことを含めてASEANの現状と可能性について触れている。前パートでおもに各国の政治発展の多様性が示されたのに対して、本パートでは、地域統合と民主化という共通課題をとりあげることによって、東南アジアという地域をひとまとまりに捉えることの意味を再確認するのである。

本文に関係するおもな資料として、巻頭に地図がある。本文中では、必要に応じて地図と写真が用いられ、おもに重要語句の説明としてコラムも20カ所以上にわたって設置されている。巻末には、略語一覧と東南アジア史年表、そして関連図書紹介が付いている。目を引くのは東南アジア史年表である。これは世界の動向（年表）を脇に並べて東南アジア各国の動向を記したものであり、「世界のなかの東南アジア」あるいは「東南アジアから見直す世界」を意図した本書ならではの配慮だといえる。

全体の評価としては、まず、事実への恣意的解釈が極力排除されており、押しつけがましさを感ぜさせないところがよい。構成もよく考えられている。類似書と比べるとインドシナ関連のページの割合が大きいが、インドシナ以外の地域についても重要な事実は落とさずフォローされている。ASEANに多くのページを割いているのも妥当だと思う。中国の台頭が著しい現在、多くの日本人の目には東南アジアの国々の存在は霞んでおり、良くも悪しくもASEANが「東南アジア」を意識するきっかけとなることは確かだと考えられるからである。

最も評価したい点は、本書が、各国の政治を主題としつつ、終始それを国際政治の文脈の中で捉えようとしている方法である。「代理戦争」や経済開発はいわずもがながだが、たとえば国民統合の問題にしても、各国の内部事情のみから理解しようとするのは誤りである。インドネシアの例でい

ば、アジア・アフリカ会議の開催や非同盟運動、さらには西イラン闘争、マレーシア対決と続くスカルノ時代の対外政策は、それが分裂する国内の結束を取り戻すために講じられたという点がとても重要である。冷戦や国際的な共産主義の展開をふまえては理解の入り口に立つことすら難しいというのがこの時期の同国の政治なのである。そのように、国内政治を対外政策との絡みで考えるための材料を常に用意しているのが本書の良さであり、学生にとっては、政治を広く観察するための感性を磨く機会ともなろう。

以上、本書の長所をいくつかあげたが、本書はその簡素さゆえの短所も有している。ひと言でいうとそれは、読んでいて退屈だということである。高校の歴史教科書のおかげで歴史が好きになったという人がまれであると同様で、本書を読んだから東南アジアのことが好きになるという人も多くはあるまい。大国に翻弄され、内乱や戦争が長く続いた東南アジア諸国の政治史は、表現に工夫をしないと、悲惨であるとか後進的であるという印象のみをあたえやすいという事実にも注意を払う必要がある。

したがって、本書を教科書として自分の講義で使用する人たちは、独自のやりかたで味つけや肉づけを行う必要がある。方法はいろいろありそうだが、意味論的な視点の導入はそのひとつだろう。東南アジアの人々にとってそもそも政治とは何か、権力とは何か、外国とはどういう存在か、といった問題を折々にとりあげ、いわば文化（政治文化）の違いを提示するのである。それを通して、悲惨であるとか後進的であるという印象とはまったく別の、東南アジア世界の奥行きや楽しさを感じてもらうということである。

たとえば、バニグノ・アキノ暗殺にはじまるフィリピンの2月革命がある。これを（マカティ・ビジネスクラブや民主野党連合を主役に立てて）政治経済的な視点から分析することはむろん可能である。しかしその一方で、2月革命の動力を生んだのは、アキノの死をイエス・キリストの死に重ね合わせて展開するフィリピン・カトリシズムの「物語」であったという見方もある。また、スハルト時代までのインドネシアにおける権

威主義体制の持続要因なども、話が膨らむテーマであろう。これについても政治経済的な説明は可能だが、その裏に存在していたといわれる意味論的要因、すなわち国家と社会におけるインド的王権概念の持続といった問題について触れてみてはどうか。そうした文化的アプローチをおもしろいと感じ、東南アジアの政治史により深い興味を抱く学生は少なくないと信じる。幸いにも、ここであげたような話をするための伏線や材料を、本書は、序章や第I部、文献紹介などで備えている。

本書は、講義のための道筋やペース配分を明示してくれる教科書である。独自の工夫による味つけは必要であるが、テキストから逸脱することなく講義を進められ、なおかつテキストを使いきる保証も見える。「はじめに」で示された3つのねらいは、やりかた次第で十分に達成可能である。値段も高すぎず、メイン・テキストとしてすぐにでも使用してみたい本である。

『東南アジア現代政治入門』は、ブルネイを除く東南アジア10カ国とさらにASEANを1章ごとに扱ったもので、執筆者は各章1名の計11名である。九州の大学で教鞭をとる3人の研究者が、執筆者をかねた編者となっている。前近代と植民地時代に3割の紙幅をあてた『入門 東南アジア現代政治史』とは異なって、本書の1～11章が対象とするのは、独立ないしは独立前夜から現在までである。それ以前の歴史については、序章において駆け足で触れるにとどめている。本書の目的は、「現代東南アジア諸国の政治を、国民国家建設、民主化、経済発展などのプロセスと問題点、アジア経済危機のインパクトとその後の体制変動などを概観」し、また「発展から取り残された弱者にも配慮したものにする」（あとがき）ことだという。

最初に気がつく本書の特徴は、ブルネイが外れたとはいえ、ラオスやミャンマー、東ティモールなど、従来の入門書では周辺的位置にあった国々を、それぞれ1章の紙幅を割いて紹介している点である。もちろん他の諸国も同じ紙幅で扱っており、東南アジアのほぼすべての国を網羅したかたちとなっている。くわえて最後に、ASEANの成立と発展を扱った章が配置されている。

本書の工夫として目に留まるのは、各章のタイトルにその国の政治を理解するためのキーワードを用い、初学者のつかみを得ようとしている点である。インドネシア（第1章）は「多様性の中の統一」、マレーシア（第2章）は「民族の政治」、フィリピン（第3章）は「争われる民主主義」、シンガポール（第4章）は「超管理国家」、タイ（第5章）は「国王を元首とする民主主義」といったぐあいであり、ベトナム（第6章）、ラオス（第7章）、カンボジア（第8章）、ミャンマー（第9章）、東ティモール（第10章）の各章にも、それぞれ鍵となる語句を付している。

内容は、概ねどの章も高い水準にあるようにみえる。文章や言葉がこなれているということや、事実関係をめぐる誤謬が（管見のかぎりだが）見当たらないという点がまず重要である。意味論的視点をまじえて政治史や政治体制を論じたものもあり、おもしろく読める。各章の冒頭で「この章で学ぶこと」を明示するなど、散漫な学習にならないための配慮もある。また、各章の最後には、「本文では書けないエピソードや虐げられる人々の物語を入れることで、本文をより理解できるように」（あとがき）との目的で、読みごたえのあるコラム（写真付き）を配置している。本文にかかわる資料として、巻頭の地図と基本情報表（面積・人口・GDP）、巻末の東南アジア関連年表、本文挿入の表、各章ごとの文献紹介がある。全体にムダがなく、仕上がりのよい本だと思う。

しかしながら、本書は、大学の学部で使用する教科書としては必ずしも適当とは言えないかもしれない。東南アジアの政治について——というよりも政治そのものについて——予備知識の少ない学生のためのテキストとしては、言葉づかいが高度すぎると感じる箇所が多い。漢字を多用しすぎていたり、フォントが小さめで余白が狭いといった視覚的な問題も、学生の教科書としてのマイナス要素である。

評者の勤め先で100人の学生を相手に講義を行う情景をシミュレートしてみると、一番の問題は本書の「構成」にある。本書は、半世紀をこえる東南アジア各国の現代政治史を、個別かつ順々に叙述するかたちをとっている。一見そこに不自然

さはないが、注意したいのは、各国の政治発展が多様であるとはいっても、それには限りがあるということだ。西欧列強の植民地支配、日本軍政、国民国家建設の苦悩と政治混乱、独裁政権の成立、経済開発、貧富の差の拡大、民主化運動と続く流れは多くの国が共有する。講義で本書を使用する場合、毎回、諸国が共有するこの流れ＝フォーマットを、学生の耳に慣れない固有名詞を埋め込みながら使っていくことになるだろう。ある国について20世紀中葉から話し始めて現在にたどりつき、次の週にはまた別の国の20世紀中葉に戻る。その反復は聴く側にとって少々つらいことかもしれない。聴く側がそう感じれば、話す側もへこたれてくる。

このように、本書を学部の教科書として使われるという確証はもてない。しかし、仮に大学院の演習向け教材としてみると、本書はかなり良好なテキストだといえるのではないか。たとえば、毎週報告者を替えて、ディスカッションの時間を多くとる。テキスト外の四方山話もどんどんするとよい。5週目をすぎたあたりから、学生たちは、東南アジアやその政治への興味を深め、比較の楽しさを味わうことになりそうだ。

（佐々木拓雄・久留米大学法学部）

小野林太郎、『海域世界の地域研究——海民と漁撈の民族考古学』地域研究叢書24、京都大学学術出版会、2011、524p.

本書は、著者が2005年に上智大学大学院外国語学研究科に提出した博士論文に、その後の調査の成果を組み入れ、加筆・修正したうえで刊行した、東南アジア海域世界を対象とする地域研究の著作である。中心的な考察の対象はセレベス海域である。セレベス海域とは、フィリピン・ミンダナオ島の南部、スルー諸島、マレーシア・サバ州の南東岸、インドネシア・スラウェシ島の北東部、サングヘ・タラウド諸島の島嶼・沿岸からなる、セレベス海を中心とする地理空間を指している。セレベス海域は、更新世期（氷河期、約180万年前から約12000年前頃まで）にも大陸化せず、また更新世期から現在まで（旧）スンダ大陸と（旧）